

# 和泉 幸一郎（いずみ・こういちろう）

## 1、プロフィール

詩人。大正 15 年頃から詩、俳句を発表。特に「北方詩風」の後藤健次との出会いによって詩人としてめざめ、「手稿」など詩誌を発行。活発に詩活動を展開した。

<生没>

1909(明治 42)年 4 月 11 日 ~ 1939(昭和 14)年 12 月 9 日

<代表作>

遺稿詩集『母の紋』

<青森との関わり>

八戸市新荒町に生まれる。八戸長者小学校、八戸高等小学校卒業後、八戸印刷会社に入り、俳句、詩を発表していく。

## 2、作家解説

明治 42 年八戸市新荒町に生まれた和泉幸一郎は、八戸高等小学校在学中から文学書に親しみ、友人と回覧雑誌を発行する。大正 12 年 15 歳の時に雑誌「童話」に童謡「五月雨」を投稿、入選する。この頃八戸から文芸誌「流星」を出していた三浦惣三郎、河野元太郎、木村源一郎ら文学活動の先輩・仲間を知り、交流が始まる。

大正 14 年八戸印刷会社(はちのへ新聞社印刷部)に入社。上司である島守静翠居(俳人)に文才を属目され、詩、俳句の教えを受ける。「はちのへ新聞」「奥南新報」に投句を始める。「北方詩風」を創刊した後藤健次と邂逅、以後文学及び人生上の深い交友とともに、詩人和泉幸一郎が開花していくことになる。

昭和 2 年階上銀行へ入社。宮原元平、中村謙太郎と回覧雑誌を発行。また民俗学に関心が深く、小井川潤次郎を訪ねて郷土研究会員となる。童謡は一樹、俳句は紅琳、都々逸は紅子、詩は和泉幸一郎、または和泉淳の名で、作品を発表していった。

昭和5年には「座標」に詩を発表して、認められる。また福士幸次郎に出会う機会を得て、ますます詩作に専念していく。同8年草飼稔、坂下徳治らと「薔薇園」、宮原元平、川井昌平らと「手稿」、同9年草飼・坂下らと「そみて」を創刊するなど、県南地方における詩の活動を活発化した若い詩人たちの中心になっていく。しかし、その一方で転居と転職を繰り返し、心身の疲労を重ねていき、同14年12月31歳の生涯を閉じるのである。

和泉幸一郎は孤独の人であった。静かな内省と憧憬をひめた天性の詩人であった。彼のよき理解者であった後藤健次の言う「浪漫的詩精神の燃焼」をその生涯をかけて行った詩人で、それゆえ作品は今なお光彩を放ち続けているのである。

没後10年の昭和24年遺稿詩集『母の紋』が発行された。

参考『青森県詩集』下

### 3、資料紹介

#### ○遺稿詩集『母の紋』

図書

1949(昭和24)年12月

210mm×170mm

「あのなっす叢書VI」として刊行された和泉幸一郎の遺稿詩集。後藤峰夫編纂。宮原元平製版。150部限定非売。著者の序文を冒頭に、8章41篇の詩を収録。年譜と後藤峰夫の文「和泉幸一郎に就て」を含む。114ページ。